

旧大社駅

島根県出雲市大社町北荒木

旧大社駅は、1912(明治45)年に出雲大社の表玄関として開業。1924(大正13)年には参詣客増加に対応すべく、ほぼ倍の規模に改築された。1990(平成2)年、JR大社線の廃止に伴い、駅舎としての役割を終える。

出雲大社の門前町にふさわしい黒い屋根瓦を葺いた入母屋の大屋根に、漆喰の白壁という、全国でも珍しい神社様式を取り入れた純和風木造平屋建ての威風は、「駅舎」としては贅を極める。鉄道駅らしい動輪マークの鬼瓦や、屋根の下り棟の先端などに施されたいろいろな動きを模した亀の造作など随所に遊び心を感じられ、何時間眺めても飽きることがない。待合室の天井にある灯籠型の和風シャンデリアも何とも趣がある。この駅舎の設計は丹羽三雄、請負(施工)は羽原音次郎との記録がある。

「モタモタしていると『汽車が出るから早く乗らんか!』と車掌さんに怒られたものです」と笑うのは往時を知る近所にお住まいの加藤紀男さん。旧大社駅は2004(平成16)年に国の重要文化財に指定。「いまやこの町の誇りです」と話す。和風の外観に対して、見上げるような高さを持つ内部の屋根裏には西洋風のトラス構造が採用されている。

しかし、老朽化は否めない。2020年中には大改修が始まる予定だという。(一社)出雲観光協会の古島尚さんは「この『古さ』、木のぬくもりだけは何とか残したい。どのような活用の道があるのか、これから議論をしていきます」と話す。温かな手触りと荘厳さを併せ持つ貴重な木造レガシーである。



昭和中期には1日2,000人もの利用者を送迎した。駅名標やホームなどが当時の姿のまま残り、皇室からの勅使などが使用した貴賓室もある。構内の柱は台湾産のヒノキや米松だ。「天井などには突貫工事で建設されたためベニヤ板が採用されました。当時としては貴重な資材だったようです」と古島さんが教えてくれた。

